埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

The Century of Terrorism/Terror/Poe : Edgar Allan Poe as Commodity (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西山, 智則 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/266

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

テロ／恐怖／ポーの世紀
― 商品としてのエドガー・アラン・ポー（1）―

The Century of Terrorism/Terror/Poe
Edgar Allan Poe as Commodity (1)

西　山　智　則
NISHIYAMA, Tomonori

はじめに

二〇〇九年はポーの生誕二百周年にあたり、日本でも日本ポー学会が発足した。そして、巽孝之・八木敏雄編集の『エドガー・アラン・ポーの世紀』が出版されている。巻頭言「ユビキタス・ポー」において、初代会長、八木敏雄は「ポーの亡霊はいまだ確実に生きていて、その『存在』はますます大きなものとなり、いたるところに偏在する霊となり、我々人類を脅かしつづけ、楽しませつづけることだろう」と書き、「本書が『エドガー・アラン・ポーの世紀』と名づけられたのは、おそらくこの二一世紀が、そういうポーが偏在する世紀、つまりユビキタス・ポーの時代になるだろうという期待と予想をこめてのことだ」という言葉を残している[1)]。この言葉を裏付けるかのように、二〇一二年に二本のポー映画『Virginia／ヴァージニア』『推理作家ポー―最期の五日間』が公開された。実際に『Virginia／ヴァージニア』ではポーが亡霊として登場する。悲しいことに、二一世紀は「ポーの世紀」となるのか。ポーが読まれ続ける時代に。そして「恐怖の君臨」する時代に。

また、スペインのアルカラ大学においても、生誕二百周年が祝われた。「不安の世紀に生き続けるポー」というテーマで、スペインの英文学会会長クリストファー・ローラーソンは「告げ口サイン―エドガー・アラン・ポーとボブ・デュラン」という基調講演を行っている[2)]。ボブ・デュランが歌詞にポーからの「借／盗用」を散りばめていること徹底的に示し、「剽窃（プラジャリズム）」にこだわりロングフェローなどを非難したポー自身もまた、全集を編纂したトマス・マボットのソース研究に明らかなように、数々の他の作品から借用していることを述べた後、こうした関係を「盗まれた」ことを「告げ口」する「剽窃（プラジャリズム）」よりは、作品同士の間の対話として、豊かな生産性につながる「インターテクスチュアリティ」と見なすことを勧めたのである。そもそも、「盗まれた手紙」にみるように、ポーにとって「盗み」は重要なキーワードである。八木敏雄はこうも言っていたことをつけ加えておこう。

ポーの生前の『人生』は、またしても奇妙な言い方になるが、死後の『人生』ともども、『盗み』『盗まれ』『盗み返す』経緯にほかならない。生前のことは

キーワード：エドガー・アラン・ポー、黒猫、赤き死の仮面、陥穽と振子、江戸川乱歩
Key words ：edgar allan poe, the black cat, the masque of the red death, the pit and the pendulum, edogawa ranpo

省略するが、ポーは死後間もなくフランスの詩人たちによって、『呪われた詩人』『明晰の魔』『文学技師』などに見立てられ、象徴主義の元祖に祭り上げられたが、これにはアメリカで所を得なかったポーがフランス人に盗まれて所を得させられたようなところがあり、それをアメリカに盗み返したのは、それまでポーの悪口を言っていたアメリカ人からイギリス人になったT・S・エリオットだった（ii）。

Ⅰ　盗まれたポー―そのアメリカへの帰還と文学史的評価

そもそも、T・S・エリオットはポー没後百年の一年前の一九四八年にポーのことを「間違ってアメリカに生まれたヨーロッパ人」と呼んでいたが、生誕百周年の一九〇九年には、G・B・ショーが「ホームレス」と呼び、「少なくとも大西洋から見た限り、アメリカにはポーのようなものはいない」と書いたポーは、そのアメリカ性を否定された存在であった[3)]。ヴァーノン・ルイス・パリントンは影響力のあった巨著『アメリカ思想主潮史』（一九二七-三〇年）において「ポーがヴァージニア的世界から遠のいていたことは確実だ」、「ポーの問題は、興味深くはあるが、『アメリカ思想主潮史』とは無関係である」と、その研究からポーを除外し、ルーシー・ハザードは『アメリカ文学におけるフロンティア』（一九二七年）で、「ポーはアメリカの地域や西部とは何の関係もなかった」と断言し、ルセル・ブランケンシップは『アメリカ文学―国家精神とその表現』（一九三一年）のなかで、「ポーの弱さは彼の時代や環境から精神的に遠ざかっていたことである」と断罪する[4)]。そうしたさなか『アメリカ古典文学研究』（一九二三年）で独創的な論を展開し、ポーをアメリカ古典文学に含めたのは、いわばイギリスの性的逸脱者たるD・H・ローレンスだった[5)]。

民主主義という点から五人の文学者を扱うF・O・マシーセンの大著『アメリカン・ルネサンス』（一九四一年）では、ポーはわずかな注釈部分に「生き埋めにされた存在」でしかなく、アメリカン・ルネサンス期の五名の偉大な文学者から排除されてしまった。一九四六年にマシーセンは『スワニー・レビュー』の第五四号にポーについて書き、ポーは「偉大な改革者」であり「国際文化に確固たる地位を占めている」としながらも、「これでもまだポーをアメリカ思想史から遠いところに残しているかもしれない」という言葉はポーアメリカの位置について物語っている[6)]。同性愛者であり一九五〇年に自殺するマシーセンだが、同性愛者の詩人ホイットマンには否定的な見解を下し、自己の同性愛嗜好を巧妙に隠蔽していると巽が示すように、むしろ親近感をいだくはずのポーをその著作から抑圧してしまった[7)]。そしてその弟子ハリー・レビンは『アメリカン・ルネサンス』にたいして、ポー、ホーソン、メルヴィルを扱う『闇の力』（一九五八年）を書きあげることになる。

ポーは「アメリカ思想主潮史」から外れたアメリカ文学の「他者」、いわば「亡霊」であった。そのきわだった病理性ゆえにポーは、批評家たちから敬遠されたのだろう。たとえば、ジョゼフ・クルーチは「ポーの小説は彼の病理性が表れたサディスティックな傾向が反映され」、「ポーは自分が気が狂わないことを証明するために推理小説を発明した」とまで書いている[8)]。ハリー・レビンの『闇の力』、レスリー・フィードラーの『アメリカ小説における愛と死』（一九六〇年）では、ポーの人種意識が指摘されていたが、ポーは南部作家と見られることはあれ、アメリカの国民的作家になることはなかった[9)]。人種問題と早

くから向き合っていたポーを、アメリカ文学の他者とすることで、人種問題を隠蔽しようする無意識的な力が批評家の間で働いていたのである。

アメリカで早すぎた埋葬にされていたポーを、まず評価したのがシャルル・ボードレールである。ボードレールに評価されることで、ポーはフランス象徴主義の教祖として崇拝され、マラルメやヴァレリーに賞讃を受けることになる。ポーの性的不能を立証しようとした一九三三年のマリー・ボナパルトの精神分析研究、パトリック・F・クインの『ポーのフランスの顔』（一九五七年）、七〇年代の脱構築主義の流行期において、「盗まれた手紙」をめぐるラカン、デリダ、バーバラ・ジョンソンの『盗まれたポー』（一九八八年）に収録された議論にみるように、ポーの研究はまずフランスで盛んになったのである[10]。ポーをピューリタン的シンボルの伝統に位置づけるチャールズ・ファイデルスンの『象徴主義とアメリカ文学』（一九五三年）があるものの、R・W・B・ルイスの『アメリカン・アダム』（一九五五年）、リチャード・チェイスの『アメリカ小説とその伝統』（一九五七年）など、アメリカ小説のアメリカ性を強調し、アメリカ性という準拠枠を構築しようとする研究者からポーは無視されていた[11]。アメリカ文学研究の黄金期、ポーはまだT・S・エリオットのいうアメリカの「異邦人（a wonderer with no fixed abode）」でしかなかったのだ。

しかし、脱構築批評の流行がすぎ去り、歴史や文化に関心が戻った八〇年代には、ポーのテクストをアメリカ的背景から論じる著作が続々と登場する。『ピムの物語』を当時流行した象形文字の文化と絡めるジョン・T・アーウィンの『アメリカの象形文字』（一九八〇年）、金貨と紙幣の対立に「黄金虫」を絡めたマーク・シェルの新歴史主義分析『芸術と貨幣』（一九八二年）、当時の文学がいかに大衆雑誌的血なまぐささに満ちていたかを説くディビッド・レナルズの『アメリカン・ルネサンスの水脈』（一九八八年）、その姉妹編で禁酒運動のパンフレットに掲載された物語と文学の連動を考察した『盃のなかの蛇』（一九九七年）が続く[12]。また、一九九三年にはノーベル賞受賞の黒人作家トニー・モリソンが『白さと想像力』で『ピムの物語』（一八三八年）をとりあげ、「アメリカのアフリカニズムにおいてポーほど重要な初期作家はいない」と書いたし、『ピムの物語』出版百五〇年を記念したナンタケット島会議の結果であり、奴隷制や文学市場の論文も収録されたリチャード・コプリー編『ポーのピム―批評の探求』（一九九二年）、『ピムの物語』を人種意識から論じるダーナ・ネルソンの『白と黒の言葉―アメリカ文学の人種を読む』（一九九二年）なども出版されている[13]。

そしてフランスに「盗まれた」ポーが、新歴史主義以降の論文集『アメリカにおけるポーの顔』によって、アメリカへと「盗み返された」のは、一九九五年のことであった。アメリカ的でないとされていたポーとアメリカの関係を再考する巽孝之の『ポウを読む』が出版されたのもこの年である[14]。それから後、ポーとアメリカの関係は研究の主流になってゆく。「近年、研究者たちは狂ったようにポーを歴史と関連させ研究してきた（historicizing）」と述べたのは、レランド・パーソンだが、ジョナサン・エルマー、ジョアン・ダイアン、テレンス・ウォーレン、メレディス・マクギルらのように、ポーとアメリカ文化を扱う優れた業績が発表されてきた[15]。ま

た、ロバート・D・ジェイコブズの『ポー―ジャーナリストと批評家』（一九六九年）やスチュアート・レヴァインの『エドガー・ポー―先見者にして雑誌職人』（一九七二年）などは早くより雑誌文化からポーを研究してきたが、日本でも津田塾大学E.A.ポー研究会は『E・A・ポーの迷宮探索』『E・A・ポーの短編を読む―多面性の文学』を出版し、二〇〇一年には、野口啓子と山口ヨシ子編の論文集『ポーと雑誌文化―マガジニストのアメリカ』が登場する[16]。二〇〇七年には野口啓子の『後ろから読むエドガー・アラン・ポー―反動とカラクリの文学』、二〇〇八年には池末陽子・辻和彦の『悪魔とハープ―エドガー・アラン・ポーと十九世紀アメリカ』が出版され、ポーのアメリカ性が詳述された[17]。二〇〇〇年代において、ポーと人種あるいは雑誌や出版文化など、アメリカとの関係は、ポー研究の最前線であったと考えてもよい。

近年のポー研究リバイバルについて、「今ポーを取り戻すことは、ポー的視点で、アメリカのダイナミズムを取り戻すことにも通じるのである」と、伊藤詔子は結論する[18]。最近、ポーについての研究書が相次いで出版されているが、入門書が多くなっているのもひとつの特徴だろう。センセーショナリムズや出版業界とポーについての論文集であるJ・ジェラルド・ケネディの『エドガー・アラン・ポーへの歴史的ガイド』（二〇〇一年）、ゴシック、SF、美学、大衆文化、奴隷制などのテーマの論文集ケビン・J・ヘイズの『ケンブリッジ・コンパニオン版エドガー・アラン・ポー』（二〇〇二年）、人生、コンテクスト、作品、受容などの枠組みでポーを解説するベンジャミン・F・フィッシャーの『エドガー・アラン・ポーへのケンブリッジ版コンパニオン』（二〇〇八年）、地理、社会、出版、文学、化学と疑似化学のコンテクストでポーを論じるヘイズの論文集『エドガー・アラン・ポーとコンテクスト』（二〇一三年）などだが、とりわけ、人種の問題を徹底的に扱う二〇〇一年のジェラルド・ケネディの『影のロマンス―ポーと人種』は最も重要な論文集である[19]。また、教材として利用されているポーの作品の数十種類におよぶ具体的な授業方法を収録したジェフリー・ウェインストックとトニー・マジストレールの『ポーの散文と詩―その教え方へのアプローチ』（二〇〇八年）は、これまでアメリカから排除されてきたポーが、いまやアメリカ文化を代表する教材になったという皮肉を如実に示唆してくれるのだから面白い[20]。

もし双子の分身的建築物ワールド・トレード・センタービルが、オリジナルなきシュミラークル時代の賜物であるならば、ハリウッド映画を「模倣」した同時多発テロで幕をあけた二一世紀は、「テロの世紀」だろう。「テロ」はむろん「恐怖」を意味するのであるから、「恐怖の世紀」でもある。倒壊映像はＴＶ画面の中で数限りなく「反復」されたが、それと同じものを過去に何度も見た記憶があるというスラヴォイ・ジジェクは、ヒッチコック監督作品『鳥』のヒロイン、ミッチーが波止場でカモメに襲撃されるシーンを持ち出し、世界貿易センターにどこからともなく追突するジェット機が、二羽の鳥に似ていると指摘した[21]。ヒッチコックがしばしば敬意を表明する作家がポーである。『サイコ』（一九六〇年）の殺人犯ノーマン・ベーツの頭上にある鳥の剥製のシーン、ポーの詩「大鴉」のヘンリー・アネレイの挿絵（一八七五年）において白いパラスの胸像の頭にとまる鴉、この二つの構

図がいかに類似していることか。追憶に浸る詩人の部屋に入って来て、「もはやない（nevermore）」という言葉を反復する大鴉とその黒い影。オリジナリティを掲げるポーだが、その「大鴉」はまた先行作品を改変したものであり、大鴉がnevermoreという言葉を変えて繰り返すように、「大鴉」の変形作品もその後無数に現われてゆく[22]。この黒い影はまた、エンパイア・スティト・ビルディングの頂で咆哮するキング・コングの姿でもある。世界貿易センタービルは、ジョン・ギラーミン監督のリメイク『キング・コング』（一九七六年）において、キング・コングが咆哮した高層建築物だったが、辺境から連れてこられた猿の叛乱を扱ったのがポーの「モルグ街の殺人」（一八四一年）であった[23]。ポーの描いた恐怖は形をかけて反復を続ける。同時多発テロにもポーの亡霊が潜んでいるのだ。『恐怖の君臨』で示したように、「テロの世紀」は恐怖を追及し続けた「ポーの世紀」となるのかもしれない[24]。

Ⅱ　商品としてのポー―そのさまざまな顔

一八五六年にシャルル・ボードレールは「額に不幸の文字が刻まれた男」とポーを称したが、そうしたイメージはポーが綿密な計算でつくり出そうとした「ひとつ」の自己イメージであり、伝記のなかで定着してゆくことになる。たとえば、一九二六年に出版されたハーヴェィ・アレンの伝記『イズラフェル』は、不幸な天才のイメージの典型だろう[25]。そのいっぽうで、ポーの異常性も強調されてきた。すでに一九二三年に医者ジョン・ロバートソンがポーのアルコール中毒に注目した『エドガー・アラン・ポー―精神病理的研究』を出版していたが、その三年後の一九二六年には、精神分析をかじりポーの病理性を追及したジョゼフ・クルーチの『エドガー・アラン・ポー―天才の研究』、一九三三年には、フロイトの愛弟子マリー・ボナパルトがポーの性的不能の影を実に数多くの作品から周到に見出そうとした精神分析批評最大の大著『エドガー・アラン・ポーの生涯と作品―精神分析的解釈』が出版されている[26]。「天才の研究」とありながらも、クルーチはポーの「狂気」を強調し、ポーの物語には「最初から最後までまともな愛」「正常な人生への関心」は存在せず、「こうした小説を書いた人間は人間であることをやめたのだ」［八二、八三頁］とまで言い放つのにたいして、アレンは孤高の文学者としての天才ポーを賞賛し、その「悲劇」を嘆き悲しむ。一種の「商品」として、様々な伝説や神話を生んだポーの伝記を比較することも興味ぶかく、大井浩二は『アメリカ伝記論』において、一九二六年に出版されたアレンとクルーチの伝記がつくりだした対極のポーのイメージを分析している[27]。

その異常性が指摘されてきたのがポーである。性的不能とされたポーは二七歳の時に、セックスへの不安から、性の知識のない一三歳の従姉妹ヴァージニアを妻に選んだと推測されている。この意味では、大学教授ハンバート・ハンバートが、一二歳の少女ドロレス・ヘイズに恋に落ちるナボコフの『ロリータ』（一九五五年）において、ハンバートが一四歳の時に思いを寄せた少女の名前アナベルが、ポーの詩「アナベル・リー」から取られているのは見逃せない。ドロリスとその母とハンバートの結婚生活は、ポーとヴァージニアとその母の関係に重なるのだ。ロリータを奪った幼児性愛者クレア・キルティはハンバートの分身であろうが、キルティを追い続けたハ

ンバートがキルティと取っ組み合いになり、どちらがどちらかわからなくなる描写は「ウィリアム・ウィルソン」（一八三九年）を連想させる[28]。ポーがいなければ、「ロリータ」という言葉すら存在しなかったのかもしれないのだ。

ポーのセックスは作家たちの想像力を掻き立ててきた。たとえば、マニー・マイヤーズの『ポー最後の謎』（一九七八年）では、ポーが初恋の人スタナード夫人に誘惑され、彼の初体験が綴られる。「そして夫人はドレスを引き上げた。少年はびっくりした。下着は一枚もつけていなかったのである。夫人はその舌を彼の口にいれた。『さあなたの才能ある口に美しい言葉をいう以上のことをさせてちょうだい』」と、性とは結びつかなかったポーのセックスが描写されるのである[29]。また、主人公の少年メイスン・レナルズがポーらと一緒に冒険をするルーディ・ラッカーのSF小説『空洞地球』（一九九〇年）では、レナルズがポーの前で妻ヴァージニアとの性交を行う場面が描かれる。「ぼくはエディがヴァージニアのいるベッドに上がっていきたくないのだと感じた。眼への恐怖、口への恐怖、猫への恐怖、渦巻きへの恐怖、そうした発言はすべて、エディが女性のもっとも秘すべき部分について恐怖を抱いていることを指し示している」と、ポーの性への強迫観念が示唆されるのだ[30]。おそらくポーはマーク・トウェインやアーネスト・ヘミングウェイと並んで、その人生が伝記という商品として頻繁に活用される作家の一人ではないだろうか。

養父のアランが商売人であったことも影響してか、ポーは当時話題のセンセーショナルな題材をうまく小説に組み込む商売人であり、本質的に「雑誌作家」であった。「ポーと大衆文化」を論じたマーク・ネイメイヤーが「もしポーの名声が二十一世紀まで残っているなら、それはたぶんに大衆文化における彼の卓越した地位のためであろう」と述べるように、売れるために大衆の好みを意識し続けたポーは、もともとポピュラー・カルチャーと相性がよかったのである[31]。ポーと大衆文化を論じた研究も少なくはない。ポーの挿絵やグッズを蒐集したポール・ハイニングの『ポー・スクラップブック』（一九七八年）、ベンジャミン・Ｆ・フィツシャーの『ポーと我らの時代』（一九八六年）、ロナルド・Ｌ・スミスの『メディアにおけるポー』（一九九〇年）、ドン・Ｇ・スミスの『ポー・シネマ』（一九九九年）や北島明弘の『映画で読むエドガー・アラン・ポー』（二〇〇九年）。これらを覗いてみると、ポーが大衆文化のいたるところに隠れていることを実感せざるをえない[32]。ポーは純文学を好む上流文化も、血なまぐさいものを求める大衆文化も、同時に満足させる文学史上かつ商業史上きわめて稀有な作家なのである。

読者らを刺激してやまないポーだが、日本でもポーを題材としたフィクションがいくつか翻訳されている。ルーディ・ラッカーの『空洞地球』、マシュー・パールの『ポー・シャドウ』（二〇〇六年）、セス・グレアム＝スミスの『ヴァンパイアハンター・リンカーン』（二〇一〇年）など、ポーの商業的効果は健在だ。ポーの子孫も登場する抱腹絶倒のジョン・バースのメタフィクション小説『サバティカル』では、大学教授の夫婦の夫は「アメリカ文学的想像力における双生児、分身と分裂症」を研究テーマとしているが、一九九三年、巽は「ジョン・バース的メタフィクション以降、ポウ・テーマのフィクションは、フィクションを再生させようとする現代作家一般の

症候群を成し始めたといっても決して過言ではない」とまで書いている[33]。ポーの未完で最後の作品となる「灯台」をモチーフに、現代作家J・キャロル・オーツは『狂気の夜』に収録の「ポーの死後の作品、灯台」を書いたが、二〇〇六年には、クリストファー・コンロン編『ポーの灯台』が出版され、二〇〇九年には、スチュアート・M・カミンスキーによるポーを題材とする短編集『ポーに捧げる二〇の物語』、二〇一三年には、ポー自身や作品をクィアー的立場から小説化したスティーヴ・バーマン編の短編集『エドガー・アラン・ポーのクィア的読み』などが後に続いている。また、ポーが最後に残した「レナルズ」という謎の言葉もまた、二〇一二年の『推理作家ポー―最期の五日間』が示すように、作家たちの想像力を煽ってきた。ジョン・ウォルシュのようにポーが毒殺されたとまで疑う伝記作家も存在する[34]。ボナパルトはポーを性的不能だと推測したが、二〇〇九年データーベース上には、二一八本ものポー映画が存在する。恐怖を糧にポーの子孫は数限りなく生み落とされ続けるのだ。

一九四九年に皮肉をこめてアレン・テイトはエッセイ「わが従弟ポー氏」を書いたが、一九八八年にナンタケット島で開催された国際ピム会議の特別講演で、ポーを「わが大叔父」に喩えたジョン・バース、『ティンブクトゥ』でポーを「俺のおじいちゃん」と呼ぶポール・オースター、ポーは皆の血族である。スコット・ピープルズの『アフターライフ・オブ・エドガー・アラン・ポー』は、ポーの位置や評価や影響を扱う著書だが、「文化的記号」と呼ばれるポーが純文学からポップ・カルチャーにいたるまで、その「死後」に「ブランド」として「使い続けられる」様子が窺い知れる[35]。ポーの「使い切った男」(一八三九年）は語り手が「著名人」スミス代将の身体に漂う謎を解明しようとする短編だが、インディアンとの戦闘でバラバラになったスミス代将が、身体を機械で補強して復活した一種の「人造的創造物（サイボーグ）」であったように、研究者、サブ・カルチャーによって「解体」され「再創造」され続けるポーの謎は解明されることはない。ポーはけっして「使い切った男」にはならないのである。

Ⅲ　大衆作家としてのポー―「黒猫」と南北戦争前のアメリカ

マイケル・ギルモアの『アメリカのロマン派文学と市場社会』は、文学が商業となった時代を生きたホーソンやメルヴィルの苦悩を早い時期にとらえた名著だが、ポーもまた恐怖を「商品化」し、小説を売らねばならなかった。「文化事業家は芸術を商業化する複雑なテクニックを考え、作者の伝記だけではなくその容貌もまた商業上の重要な要素と見なした」とギルモアは書いている[36]。作者の顔までが「商品」となる、文学の「文学性」ならぬ「商業性」が問われる時代。アレクアンダー・ハモンドにしたがえば、小説を消費する読者、それを提供する作家の関係を、「食べる」という消費の隠喩でポーはとらえたという。『ピムの物語』（一八三八年）において、船の叛乱の危険を知らせるために、血で書いた手紙をピムに書いて送り、死後その死体がサメに貪り喰われてしまうオーガスタスの姿には、読者に消費させるために自己を商品として差し出さねばならない作者の運命が見出せるのである[37]。

ディビッド・レナルズの立場を発展させたカレン・ハルツーネンは、小冊子などに掲載

された扇情的な物語群を詳細に検証しているが、ポーのテクストもこれらと無縁ではいられない[38]。たとえば、その不気味な血なまぐささゆえに何度も映画化され、ポーの恐怖作家の顔を代表する「黒猫」（一八四三年）を再読してみたい。酒に耽溺するようになった語り手が、一匹目の黒猫プルートの眼をナイフでえぐり木から吊るし、二匹目の黒猫に代わって妻を殺害し、死体を壁に塗り込めるも犯罪が発覚し、絞首刑をひかえて自分の生涯を「告白」するという一種の「自伝的」な体裁の物語である。それは酒がひき起こす女性虐待など家庭内暴力事件を起した犯人の告白を収録した禁酒運動パンフレットに似ている。スコット・ピープルズによれば、そもそも、ポーの人生そのものが、一八五二年の『ナショナル・マガジン』において、禁酒運動を推進するための警告の物語として掲載されたくらいである。

また、一八三一年、黒人奴隷たちが白人五十人以上を虐殺したナット・ターナーの反乱が勃発し、トマス・グレイの『ナット・ターナーの告白』が版を重ね、セオドア・ウエルズの『アメリカ奴隷制度の現状』（一八三九年）が大量に売れるなど、鞭打ちなどの恐怖を描いた書物が流通していた。二〇一四年のアカデミー作品賞を受賞したスティーヴ・マックイーン監督作品『それでも夜は明ける』の原作であるソロモン・ノーサップの一八五三年の回顧録『12 Years a Slave』も鞭打ちのシーンを見せ場しており、それはハリウッド映画版でも継承されている。一八四一年のある朝、自由黒人で家族もあったソロモンが、目が覚めると奴隷として牢獄で鎖につながれ、南部に売られてしまい、奴隷から自由になるまで一二年間の苦境を綴るのがこの手記である。それは、目覚めると地下の牢獄に繋がれ、振子が自分を切断しようと降りてくるポーの「陥穽と振子」に類似している。奴隷制が「底のない穴」「カトリックの異端審問の牢獄」などに喩えられた当時、「陥穽と振子」がいかに奴隷制の恐怖を活用しているかをテレサ・ゴデューは立証している[39]。「黒猫」もまた奴隷制の恐怖や酒がひきおこす女性虐待の恐怖を利用しているのである。壁から聞こえてくる「声」は、白人男性の「所有物（ペット）」として迫害された二つの存在に対する罪を「告げ口」する。女性と黒人に向けられた暴力を。

語り手が嫌えば嫌うほど、「片時も離れずつき纏い…身の毛もよだつ愛撫をせがむ」というどこか女の愛を思わせる黒猫の描写からわかるように、「黒猫」は男と女の愛の残酷な寓話でもある[40]。J・キャロル・オーツは「黒猫」を意識した短編「白猫」において、金持ちの男性と若い女優、そして白いペルシャ猫にまつわる愛と憎悪の物語を展開した。横山孝が示すように、これまで「黒猫」は、ポーの作品とはとてもいいがたいボリス・カーロフとベラ・ルゴシ主演の『黒猫』（一九三四年）をはじめ、ルチオ・フルチやダリオ・アルジェントらホラー映画監督に数多く映画化され、スティーブン・キングの映画化作品『ペット・セメタリー』（一九八九年）にまでそのイメージが継承されている可能性が高いが[41]、TVシリーズ『13 thirteen』の一話としてのスュアート・ゴードンが監督した『黒猫』では、ポーとヴァージニアが語り手と妻に設定されており興味深い。罪が暴露され、壁の中で黒猫の黒い毛並みに開かれる真っ赤な口と牙、それに加えて斧で虐殺され割れた妻の顔が女性性器のように写され、「牙の生えた膣」として恐怖を呼び起すのである。語り手によって片目

をえぐられ、空洞になった黒猫の眼窩は去勢の恐怖を煽ってくるのだ。「ライジーア」「告げ口心臓」にみるように、眼はポー文学の強迫観念でもある。

「黒猫」は「所有物」として扱われる女性虐待の物語である。妻を殺害した語り手は、死体を「あたかも商品のように装い、梱包し、家から運び出すこと」まで考えるのである［八五六頁］。黒猫は魔女の化身だとテクストには書かれており、黒猫を木から吊るすという所業は、巽孝之も指摘するように、魔女狩りの再現でもある[42]。そもそも、一六九二年のアメリカ史に悪名高いセイラムの魔女狩り以来、魔女狩りとは、ナサニエル・ホーソンの先祖も登場するロブ・ゾンビ監督の最新映画『ロード・オブ・セイラム』（二〇一二年）にも見るように、幾度となく回帰してくる女性虐待の暗い記憶である。黒猫の真っ赤で牙のある口は、女性虐待の罪を「告げ口」するのだ。

また、主人の肌に爪を立てて反逆する黒猫に、奴隷の叛乱も読み込むこともできる。「主人」である白人の語り手は、その「所有物（ペット）」プルートによって、火事が起き「家財」を失い、終いに妻を殺害し、犯罪が発覚して絞首刑になるわけだが、木に吊るされた黒猫は、レスリー・ギンズバーグが示したように、リンチにされた奴隷の表象である[43]。焼けた家の白い壁に浮かびあがる黒猫の刻印、また、黒猫の胸で次第に大きくなり絞首台の形となる白い斑点は、「ウィリアム・ウィルソン」の語り手の良心である分身のように、語り手の罪を咎めにくる。だが、そこで告発されるのは、語り手個人の罪ではなく、人間を「商品」とする奴隷制度にまつわる国家的な罪だろう。それならば、語り手が猫を吊るすことを「許されない罪（デッドリー・シン）」［八五二頁］と呼ぶことも不思議ではない。フロイトのいう「不気味なもの」として抑圧された存在が回帰してくる。「よくできた家」［八五八頁］の壁が崩され、死体が暴露されるように、ポーが書評を書いたとされる『合衆国の奴隷制度』『南部の擁護』で織りなされた優しい主人と忠実な奴隷の物語を、「黒猫」はその爪で引き裂き、崩壊させるのである。アメリカ的ではないとされたポーの文学だが、「黒猫」は白い紙のテクストのうえに、「黒い力」が抑圧された暗い罪を焼きつけた典型的アメリカン・ゴシックだった。

Ⅳ　密室と膨張の政治学―ポー・江戸川乱歩・他者恐怖

生誕二百周年を記念して二〇〇九年にフィラデルフィアでは「第三回国際エドガー・アラン・ポー会議」が行われた。バーバラ・カンタルーポ編の論文集『ポーの莫大なる影響（Poe's Pervasive Influence）』（二〇一二年）のタイトルが示すように[44]、また、八木の「ユビキタス・ポー」の言葉のとおり、ポーは世界に「偏在」し、その「影響」もはかりしれない。伊藤詔子や笠井潔の論も掲載されたこの論集では、ポーの名前を「盗んだ」日本のポー、江戸川乱歩を論じているものが目立つ。マーク・シルバーの『盗まれた文学―文化的借用と日本犯罪小説（Purloined Letters）』（二〇〇八年）によれば、「明」るく「治」めるという明治以降、西洋に「なりすまし」、西洋文化を「模倣」する日本において、探偵の理性が奇怪な謎を「解明」し、混沌とした闇の世界を「統治」する推理小説は重要な文学ジャンルであり、「模倣」しようとするポーの「影響の不安」に怯えながらも、時代の寵児「明智小五郎」を活躍させる乱歩は積極的

に推理小説を「借用」し、西洋の作家たちに肩を並べようとする一人だった[45]。日本なりの推理小説を成立させようとする乱歩には、密室が成立しがたい日本建築において、密室殺人のトリックに挑戦した「D坂の殺人事件」（一九二四年）がある。そこでは、「君はポーの『ル・モルグ』やルルーの『黄色い部屋』などの材料になった、あのパリのRose Delacourt事件を知っているでしょう」、「そうですね。実に不思議ですね。よく日本の建築では外国の探偵小説にあるような深刻な犯罪は起こらないなんていいますが、僕はけっしてそうじゃないと思いますよ」という対話が展開される[46]。

乱歩のテクストには、「元祖狢饅頭」をめぐる二軒の老舗の争いから相手になりかわる殺人事件が起こる「石榴」をはじめ、「双生児」「目羅博士」など、瓜二つの存在や分身的要素に関する「アイデンティティ」の問題がしばしば浮上する[47]。また、芋虫、シャム双生児、人間椅子など畸形に「変貌」した人間があふれているが、マーク・シルバーによれば、これらは西洋を「模倣」することで「変貌」してしまった日本の表象である。『パノラマ島奇談』（一九二六年）は、財閥菰田家の死亡した当主にそっくりな「双生児」のような容貌の人見広助が、当主に「なりすまし」、その財力で孤島に奇怪な人間たちの溢れる悪夢の楽園をつくりだすという小説である。作品中にも言及があるように、ポーの「アルンハイムへの道」を下敷きにしている。一八九〇年に上野に日本初のパノラマ館が開園して以来、異国や戦場の風景をスペクタクルに見せつけるパノラマは、中国へ欲望のまなざしをむけ、「膨張」を目指す日本の植民地主義を煽ってきた。人見広助はパノラマ館の印象を語る。「一度パノラマ館にはいると…広々とした満州の平野が、はるか地平線の彼方までも打続いているではないか。そこには見るも恐ろしい血みどろの戦いが行なわれているのだ」[48]。乱歩が描いたパノラマ島とは、当時パノラマ装置が広大な領土への欲望を煽った満州国の恐怖の表象にほかならない。植民地への欲望によって領土が拡大してゆく時代、密室殺人にこだわったのが乱歩だとすれば、ポーは早くからそのことを見抜いていた。

一八四五年のジョン・オサリヴァンの「明白なる使命」というスローガンのもと、帝国の領土が拡大された時代に、「モルグ街の殺人」などで密室殺人にこだわったポーは、膨張を続け、他者をしめだす帝国の閉鎖性を喝破していた。侵入者によって崩壊するのが、ポーの密室である。たとえば、アメリカ先住民を思わせるキャリバンが「赤い病でくたばれ。言葉を教えた罰だ」というセリフを吐くシェイクスピアの『テンペスト』（一六一一年）から、プロスペローの名前を借用した「赤き死の仮面」では、疫病が蔓延する外部から隔絶されたプロスペローの城に「赤き死の仮面」の人物が侵入してくるのである。強制移住政策により先住民が隔離されたこの時期、先住民という「赤い血」との混淆の恐怖をそこに読み込むことは可能である。エドウィン・ファッセルはこの短編を「アメリカ史の寓話」と見なし、ロバート・クラークはこの疫病に「赤いインディアンの報復、プロスペローが追い払いたい罪の意識」を見出し、最近では、西には赤い部屋が位置する七つの色の城に、巽は「黒い肌や赤い肌の乱舞する他民族国家（カラフル）アメリカ」を指摘していた[49]。「赤い恐怖」は、『絶対の危機』（一九五八年）の巨大化する赤いアメーバ、『宇宙戦争』（一九五三年）の地

球に赤い草を繁殖させる火星人など、赤狩り時期に「共産主義」を「赤い恐怖」と揶揄する冷戦期ハリウッドSF映画を経過し、現在では北朝鮮の赤い恐怖へと置き換わって反復される。ホワイトハウスが北朝鮮系テロリストに占拠される『エンド・オブ・ホワイトハウス』（二〇一三年）、北朝鮮に侵略されたアメリカで少年たちがゲリラ戦を繰り広げる『レッド・ドーン』（二〇一三年）といった映画が、飽きることなく製作されているのだから。

現代日本において、放射能や病原菌など見えない恐怖に人々は震え、あたかも仮面舞踏会のように、真夏でもマスクをつけている。「パンデミック」を開始しているのは、インフルエンザなどではなく、むしろマスクのほうではないか。侵入に脅えるマスクの背後には、個人の「身体」への恐怖のみならず、竹島・尖閣の領土に他者が侵入してくるかもしれないという国家の「政体」に関する恐怖があるにちがいない[50]。「赤き死の仮面」にみるように、マスクや疫病はポーの得意のテーマだが、排他的な愛国心と閉塞感が漂い、国家が密室となりつつある現代日本もまた、「ポーの世紀」に突入しているのかもしれない。「一五〇年以上の間、研究者たちは『ポーが何であったか（what Poe was)』というよりは、『ポーが何であるか（what Poe is)』、という問いを考え続けてきた」と、スコット・ピープルズはいう。研究方法に変動が訪れるたびに、最新の方法が適用されてきたのがポーである。ポーのテクストによって批評の方法論が試されているといってもよい。二〇一二年の二本の映画、『Virginia／ヴァージニア』『推理作家ポー―最期の五日間』が示すように、作家エドガー・アラン・ポーは商品化され、現在に生きている。そう、ポーの亡霊はさまよい続けているのだ。

註

1）八木敏雄「巻頭言　ユビキタス・ポー」巽孝之・八木敏雄編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、二〇〇九年）ⅰ.

2）Christpher Rollason, “Tell-Tale Signs: Edgar Allan Poe and Bob Dylan: Toward a Model of Intertextuality,” *Atlantis: Journal of the Spanish Association of Anglo-American Studies* 31.2 (December 2009) : 41-56.

3）T. S. Eliot, “From Poe to Valéry,” *The Recognition of Edgar Allan Poe: Selected Criticism since 1829,* ed. Eric W. Carlson (1966; Ann Arbor: U of Michigan P, 1970) 207. George Bernard Shaw, “Edgar Allan Poe,” *The Recognition of Edgar Allan Poe,* 96.

4）Vernon Louis Parrington, *Main Currents in American Thought: An Interpretation of American Literature from the Beginning to 1927* (New York: Harcourt, Brace,and World, 1927) 57-8. Lucy Lockwood Hazard, *The Frontier in American Literature* (New York: Crowell, 1927) 84. Russell Blankenship, *American Literature: As an Expression of the American Mind* (New York: Henry Holt, 1931) 217.

5）D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (New York: Thomas Seltzer, 1923) .

6）F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (New York: Oxford UP, 1941) . F. O. Matthiessen, “Poe,” *Swanee Review* 54 (1946) : 204.

7）巽孝之『アメリカン・ソドム』（研究社、二〇〇一年）三一五-三九.

8）Joseph Wood Krutch, *Edgar Allan Poe: A Study in Genius* (New York: A.A. Knopf, 1926) 87,82.

9）Harry Levin, *The Power of Blackness:*

Hawthorne, Poe, Melville（New York: A.A.Knopf, 1958）. Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel*（1960; New York: Anchor, 1992）.

10）Patrick F. Quinn, *The French Face of Edgar Allan Poe*（Carbondale: Southern Illinois UP, 1957）. John P. J. Muller and William J. Richardson, *The Purloined Poe: Lacan, Derrida, and Psychoanalytic Reading*（Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1988）.

11）Charles Feidelson Jr., *Symbolism and American Literature*（1953; Chicago and London: U of Chicago P, 1965）. Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition*（New York: Doubleday, 1957）. R. W. B. Lewis, *The American Adam: Innocence Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century*（Chicago and London: U of Chicago P, 1955）.

12）John T. Irwin, *American Hieroglyphics: The Symbol of Egyptian Hieroglyphics in the American Renaissance*（New Haven and London: Yale UP, 1980）. Marc Shell, *Money, Language, and Thought: Literary and Philosophical Economies from the Medieval to the Modern Era*（Berkeley: U of California P, 1982）. David S. Reynolds, *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*（New York: A. A. Knopf, 1988）. David S. Reynolds and Debra J. Rosenthal, ed. *The Serpent in the Cup: Temperance in American Literature*（Massachusetts: U of Massachusetts P, 1997）.

13）Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*（New York: Vintage, 1993）32. Richard Kopley, ed. *Poe's Pym: Critical Explorations*（Durham and London: Duke UP, 1992）. Dana D. Nelson, *The Word in Black and White: Reading "Race" in American Literature, 1638-1867*（New York: Oxford UP, 1992）.

14）Shawn Rosenheim and Stephen Rachman, eds. *The American Face of Edgar Allan Poe*（Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1995）. 巽孝之『E・A・ポウを読む』（岩波書店、一九九五年）.

15）Leland S. Person, "Crusing［Perversely］for Context: Poe and Murder, Women and Ape," *Poe and the Remapping of Antebellum Print Culture,* eds. J. Gerald Kennedy and Jerome McGann（Baton Rouge: Lousiana States UP, 2012）144. Jonathan Elmer, *Reading at the Social Limit: Affect, Mass Culture, and Edgar Allan Poe*（Stanford: Stanford UP, 1995）. Joan Dayan, "Amorous Bondage: Poe, Ladies, and Slaves," *The American Face of Edgar Allan Poe,* 179-209. Terence Whalen, *Edgar Allan Poe and the Masses*（Princeton: Princeton UP, 1999）. Meredith L. McGill, *American Literature and the Culture of Reprinting, 1834-1853*（Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2003）.

16）津田塾大学言語文化研究所E・A・ポー研究会編『E・A・ポーの迷宮探索』（津田塾大学言語文化研究所E・A・ポー研究会、一九九六年）. 板橋好枝・野口啓子編『E・A・ポーの短編を読む―多面性の文学』（勁草書房、一九九九年）. 野口啓子・山口ヨシ子編『ポーと雑誌文学―マガジニストのアメリカ』（彩流社、二〇〇一年）. Robert D. Jacobs, *Poe: Journalist and Critic*（Baton Rouge: Louisiana State UP, 1969）. Stuart Levine, *Edgar Poe: Seer and Craftsman*（Deland, FL: Everett/Edwards, 1972）.

17）野口啓子『後ろから読むエドガー・アラン・ポー―反動とカラクリの文学』（彩流社、二〇〇七年）. 池末陽子・辻和彦『悪魔とハープ―エドガー・アラン・ポーと十九世紀アメリカ』（音羽書房鶴見書店、二〇〇八年）.

18）伊藤詔子「英米文学とポー」『エドガー・アラン・ポーの世紀』三一.

19）J. Gerald Kennedy, ed. *A Historical Guide to Edgar Allan Poe*（New York: Oxford UP, 2001）. Kevin J. Hayes, ed. *The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe*（New York: Cambridge UP, 2002）. Benjamin F Fisher, *The Cambridge*

Introduction to Edgar Allan Poe（Cambridge: Cambridge UP, 2008）. Kevin J Hayes, ed. *Edgar Allan Poe in Context*（New York : Cambridge UP, 2013）. J. Gerald Kennedy and Liliane Weissberg, ed. *Romancing the Shadow: Poe and Race*（New York: Oxford UP, 2001）.

20）Jeffrey Andrew Weinstock and Tony Magistrale, eds. *Approaches to Teaching Poe's Prose and Poetry*（New York: MLA, 2008）.

21）スラヴォイ・ジジェク「現実界の砂漠にようこそ」村山敏勝訳『現代思想二九巻一三号　これは戦争か』（青土社、二〇〇一年一〇月）一三.

22）Eliza Richards, "Poe's Lyrical Media: The Raven's Returns," *Poe and the Remapping of Antebellum Print Culture,* 200-224.

23）メリアン・C・クーパ監督の『キング・コング』（一九三三年）がなければ、任天堂のゲーム『ドンキーコング』において、北米で版権が取れなかったポパイに代わって、コングから美女を救出するマリオというキャラクターも存在しなかっただろうと小野俊太郎は推測するが、おそらくはポーの「モルグ街の殺人」が存在せねば、これらのテクストもなかったのかもしれない。小野俊太郎『ゴジラの精神史』（彩流社、二〇一四年）一二六.

24）西山智則『恐怖の君臨―疫病・テロ・畸形のアメリカ映画』（森話社、二〇一三年）七-四〇.

25）Hervey Allen, *Israfel: The Life and Times of Edgar Allan Poe*（1926; New York: Farrar and Rinehart, 1934）.

26）John W. Roberson, *Edgar Allan Poe: A Psychopathic Study*（New York and London: Putnam, 1923）. Marie Bonaparte, *The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation,* trans. John Rodker（1933; London: Hogarth, 1970）.

27）大井浩二『アメリカ伝記論』（英潮社、一九九八年）九五-一一〇.

28）後藤篤「奇術師の『ダブル・トーク』―ポー、ロシア・モダニズム、ナボコフ」『ポー研究　第五・六号』（日本ポー学会、二〇一四年）一八-二七.

29）マニー・マイヤーズ・横川信義訳『ポー最後の謎』（一九七八年、角川書店、一九八一年）二〇〇.

30）ルーディ・ラッカー・黒丸尚訳『空洞地球』（一九九〇年、早川書房、一九九一年）一五五.

31）Mark Neimeyer, "Poe and Popular Culture," *The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe,* 208.

32）Paul Haining, ed. *The Edgar Allan Poe Scrapbook*（London: New English Library, 1978）. Benjamin F. Fisher, ed. *Poe and Our Times*（Baltimore: Edgar Allan Poe Society,1986）. Ronald L. Smith, *Poe in the Media: Screen, Songs, and Spoken Word Recordings*（New York and London: Garland, 1990）. Don G. Smith, *The Poe Cinema: A Critical Filmography of Theatrical Releases Based on the Works of Edgar Allan Poe*（Jefferson, NC: McFarlandand & Company, 1999）. 北島明弘『映画で読むエドガー・アラン・ポー』（近代映画社、二〇〇九年）.

33）巽孝之『メタフィクションの謀略』（筑摩書房、一九九三年）一〇一.

34）J. Carrol Oates, "Poe Posthumous; Or the Lighthouse," *Wild Nights*（New York: Harper Perennial, 2008）. Chritopher Conlon, ed. *Poe's Lighthouse*（Baltimore: Cemetery Dance Publications, 2006）. Stuart M. Kaminsky, ed. *On A Raven's Wing : New Tales in Honor of Edgar Allan Poe*（Armonk: Baror International, 2009）. Steve Berman, ed. *Where Thy Dark Eye Glances: Queering Edgar Allan Poe*（Maple Shade: Lethe P, 2013）. John Evangelist Walsh, *Midnight Dreary: The Mysterious Death of Edgar Allan Poe*（New Brunswick: Rutgers UP, 1998）.

35）Scott Peeples, *The Afterlife of Edgar Allan Poe*（New York: Camden House, 2004）125.

36）Michael T. Gilmore, *American Romanticism and the Marketplace*（Chicago: U of Chicago P, 1985）4.

37）Alexander Hammond, "Consumption, Exchange, and the Literary Marketplace: From the Folio Club Tales to *Pym," Poe's Pym,* 153-166.

38）Karen Halttunen, *Murder Most Foul: The Killer*

and the American Gothic Imagination（Cambridge: Harvard UP, 1998）.

39）Teresa A. Goddu,“Poe, Sensationalism, and Slavery,”*The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe,* 92-113.

40）Edgar Allan Poe, *Collected Works of Edgar Allan Poe, 3 vols,* ed. Thomas O. Mabbott（Cambridge: Belknap P of Harvard UP, 1978）855.

41）横山孝「ポーの『黒猫』とホラー映画」『New Perspective』一九三号（新英米文学会、二〇一一年七月）一六-二〇.

42）巽孝之「密告する動物園―『黒猫』鑑定」『文学する若きアメリカ―ポウ、ホーソン、メルヴィル』（南雲堂、一九八九年）八八-一〇八.

43）Lesley Ginsberg,“Slavery and the Gothic Horror of Poe's ‘The Black Cat,’ ”*American Gothic: New Interventions in a National Narrative,* eds. Robert K. Martin and Eric Savoy（Iowa City: U of Iowa P, 1998）99-128.

44）Barbara Cantalupo, *Poe's Pervasive Influence*（Bethehem: Lehigh UP, 2012）.

45）Mark Silver, *Purloined Letters: Cultural Borrowing and Japanese Crime Literature 1868-1937*（Honolulu: U of Hawai'i P, 2008）.

46）江戸川乱歩『D坂の殺人事件』（一九二四年、創元推理文庫、一九八七年）四七.

47）ソポクレスの『オイディプス王』は、テーバイに蔓延する疫病の原因としての穢れをさぐりだそうとする点において、一種の推理小説的要素を含むが、知らずに父を殺害していた自分自身が穢れ原因であったことを知るこの悲劇は、探偵こそが犯人であるという物語でもある。そもそも、探偵は犯人になりきり、犯人の視点で謎を推理するものであるとすれば、犯人と探偵は同一の存在でもある。佐藤嗣麻子監督作品『K-20　怪人二十面相・伝』（二〇〇八年）の仲村トオル演じる明智小五郎が怪人二十面相であったというトリックも、こうした探偵小説の構造の延長線上にある。

48）江戸川乱歩『江戸川乱歩全集２　パノラマ島奇談』（一九二六年、講談社、一九六九年）二七一.

49）Edwin Fussell, *Frontier: American literature and the American West*（Princeton: Princeton UP, 1965）165. Robert Clark, *History, Ideology, and Myth in American Fiction,1823-52*（London: Macmillan P,1984）37. 巽孝之『E・A・ポウを読む』八八.

50）赤阪俊一・米村泰明・尾崎恭一・西山智則『〈パンデミック〉病の文化史』（人間と歴史社、二〇一三年）二九一-三〇六.

本稿は日本アメリカ文学会関西支部７月例会のシンポジウム「恐怖の君臨―盗品／商品／複製としてのポー」において口頭発表したものを活字化したものである。